

終わりと始まり

旭川市立忠和中学校 三年 加藤 優紺

夜更け。ふと思ひ立つてベランダに出ると、私は一人夜の静寂と鼻を通る冷めた香りに身を包まる。時が経つていくと家は一つ、また一つと眠つていく。そうして、この世界にいるのは私だけになる。こんな夜の月は、私に悲しさを思い出させる。もう戻ることのない、かけがえのない日々への――。

あなたと夜、電話越しに話したこと。同じ月を見ていたから距離なんて感じなかつたね。あなたと暗くなつていく道で自転車を漕いだこと。真っ赤な月を見つけてふと足を止めたね。そして、あなたと空に咲く大きな花火を見たこと。夜空に輝く花火と月はなんとも言えない美しさだつたね。花火が上がる。一つ、また一つと空に打ち上がり、私たちに花開く。そして墜落する。そんな様子を横目に、ふと隣を見たら当たり前にあなたがいた。何を思つてあなたを見たのかは分からぬ。けれど、多分怖かったのだろう。この花火が終わつたらもう、あなたとこんな風に過ごせる最後のような気がしたから。修学旅行。体育祭。夏休み。そして、花火大会。色々なイベントが過ぎていく。それは三年生の終わりを告げていくのに等しかつた。

思い返せば、小学一年生から中学三年生までの九年間。当たり前にあなたが隣にいた。けれど来年はどうだろう。これからはお互いの未来に向かつてそれぞれの道を歩く。私にとつての当たり前がなくなることがどうにも不安で怖くて、なにより寂しい。こんな気持ち、去年までは抱かなかつたのに。

ラストの花火が空に打ち上がる。そして、眩しい程の綺麗な光が咲く。それと同時に私たちの夏が終わつた音がした。あなたは何も言わぬただ、暗闇の中、花火の残花を見ていた。その時どんな表情をしていたのかは私には分からぬ。花火が上がつていた時はあんなに明るくて、騒がしかつたのに、終わつてしまえば妙に静かであるで花火なんてなかつたよう。

「終わつちゃつたね」

真っ黒な世界に呟く。今までこれはこれから先もこんな風にあなたと笑い合つていると思つていた。しかし、そんなことは叶わないのだ。進路という言葉が身近になつて気付かされる。あなたと一緒に歩いていた道は行き止まりを迎える、ここからは自分だけの道を切り開いていかなければならぬということに。けれど、私はずっと止ま

つて いる。こんな当たり前が終わることが受け入れられないから。なのに、あなたは少しづつ自分の道に向かって歩いていく。私に背を向けて進んでいく。あなたとまだいたいと思っていたのは私だけなのだろうか。

「私はまだ、終わってほしくない」

唐突にあなたのその言葉が真っ黒な世界に放たれた。あなたの方向を向くと、続けて口を動かす。

「でも、進まないといけないんだよ」

その瞬間、雲から月が現れ、世界を優しく照らす。それと同時にあなたの表情が色を持つ。私を見つめるその目には、今までの日々と未来への不安。そして、決心が映つていた。

その時、私は気付かされる。私はただ未来が怖くて逃げていただけだったことに。けれど、あなたも怖いのだ。私と同じように。それでも、進むことを選んだ。なのに、私はいつまで止まっているつもりなのだろう。今こそ、一步を踏み出す時だ。

月は、もう戻らない日々への悲しさを運んだ。でもそれは過去に囚われていたから。これからはきっともう大丈夫。月はかけがえのない思い出と未来への希望を運んでくれる。

道は違えど、向いてる方向は皆同じ。これから先、また交わることもあるかもしれない。だから私は私だけの道を歩んでいこう。こんな夜の月は私だけを照らしてくれる。私が私という物語の主人公なのだ。外の空気を目一杯吸いこみ、ベランダから家へと戻つていった。